

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

三嶋大明神と「薬師堂」のジオグラフィー：  
東京都利島堂ノ山神社境内祭祀遺跡の性格をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 公開日: 2023-02-09 キーワード: 三嶋大明神, 祭祀遺跡, 『三宅記』, 積石遺構, 薬師如来 作成者: 深澤, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001999">https://doi.org/10.57529/00001999</a>

# 三嶋大明神と「薬師堂」のジオグラフィー —東京都利島堂ノ山神社境内祭祀遺跡の性格をめぐって—

深澤太郎

## 要旨

伊豆諸島の島々では、中世から今日まで、積石信仰や和鏡を用いた祭祀が盛んに行われてきた。その内、和鏡をはじめとする多数の遺物が出土した東京都利島の堂ノ山神社境内祭祀遺跡は、12世紀後半から近世にかけて営まれた積石祭祀の痕跡を今に残す貴重な事例だが、神社自体は明治期の神社合祀で成立した社であり、その前史には不明な点が多い。しかし、堂ノ山神社の前身を在島の古文書に見える「堂山薬師」ではないかとする指摘は、久しく顧みられてこなかったものの早くから提起されてきたところである。そこで本稿では、複数の近世・近代文書類や絵図などを比較検討することで、堂山薬師（薬師堂）と堂ノ山神社が一連の系譜関係にある可能性を再検証した。勿論、本稿で取り上げた史料は近現代の例に限られるが、堂ノ山神社の地が中世から三嶋大明神の本地仏である薬師如来を祀る「堂」ノ山であった事実は、同社境内遺跡の実態が示唆するところであり、関連遺跡の性格についても伊豆諸島在来の三嶋信仰・薬師信仰のコンテキストの中で位置付けるべきものと考えられる。

## キーワード

三嶋大明神、祭祀遺跡、『三宅記』、積石遺構、薬師如来

## I. はじめに

相模灘の沖に連なる伊豆諸島では、中世から今日まで、積石信仰や和鏡を用いた祭祀が盛んに行われてきた。これらの積石には、平面的な集石に止まる例もあれば、三宅島の物見処遺跡例のように高い墳丘を持つ大型積石もあり（吉田編1983～2001）、御蔵島の神ノ尾遺跡例のような墓としての積石も存在する（青木・内川編1994a）。しかし、多くの事例は共伴する遺物が少なく、遺構の形成時期や継続時期など、肝心な年代的情報に乏しい憾みがあった。

その一方で、利島の阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡や堂ノ山神社境内祭祀遺跡からは（青木・内川編1994b、青木・内川・須藤編2005）、12世紀から近代までの供献品が多量に出土しており、近在の八幡神社境内遺跡例も概ね共通した様相を呈しているという（青木・内川・金成編1999）。勿論、出土遺物の上限年代を、直ちに積石遺構の初源に結び付けることは困難だが、いずれも13世紀から15世紀に最盛期を迎えた点では共通している。その年代が、伊豆・伊豆諸島を中心に信仰を集めた三嶋神の『三嶋大明神縁起』、通称『三宅記』が成立したと見られる時期と前後している事実は、重く受け止められるべきであろう（三橋1978）。

ともあれ、伊豆諸島においては、多くの積石遺構の同時代史料となる中世文書が殆ど存在しない現実がある。そのため、考古学的に示された「マツリのアトの静けさ」が、いかなる意図による行為の痕跡なのかを追及する試みの先には、常に同じ袋小路が待ち構えているのだ。従って、遺跡・遺構として今日に残された中世信仰の実態に、ごく僅かでも接近していくためには、考古学・歴史学的方法に留まることなく、可能な限りの学際的な情報収集と、豊かな仮説の提示が求められる。

そこで私たちは、考古学的検討を進める傍らで伊豆諸島関連の史料・絵図等を収集し、前近代の自然・人文環境や地理認識を把握する前提的作業を行ってきた。本稿では、かかる意図に基く調査を進める中で得た知見の内、現在堂ノ山神社境内となっている「場」の旧態に関する検討成果を報告しておきたい。

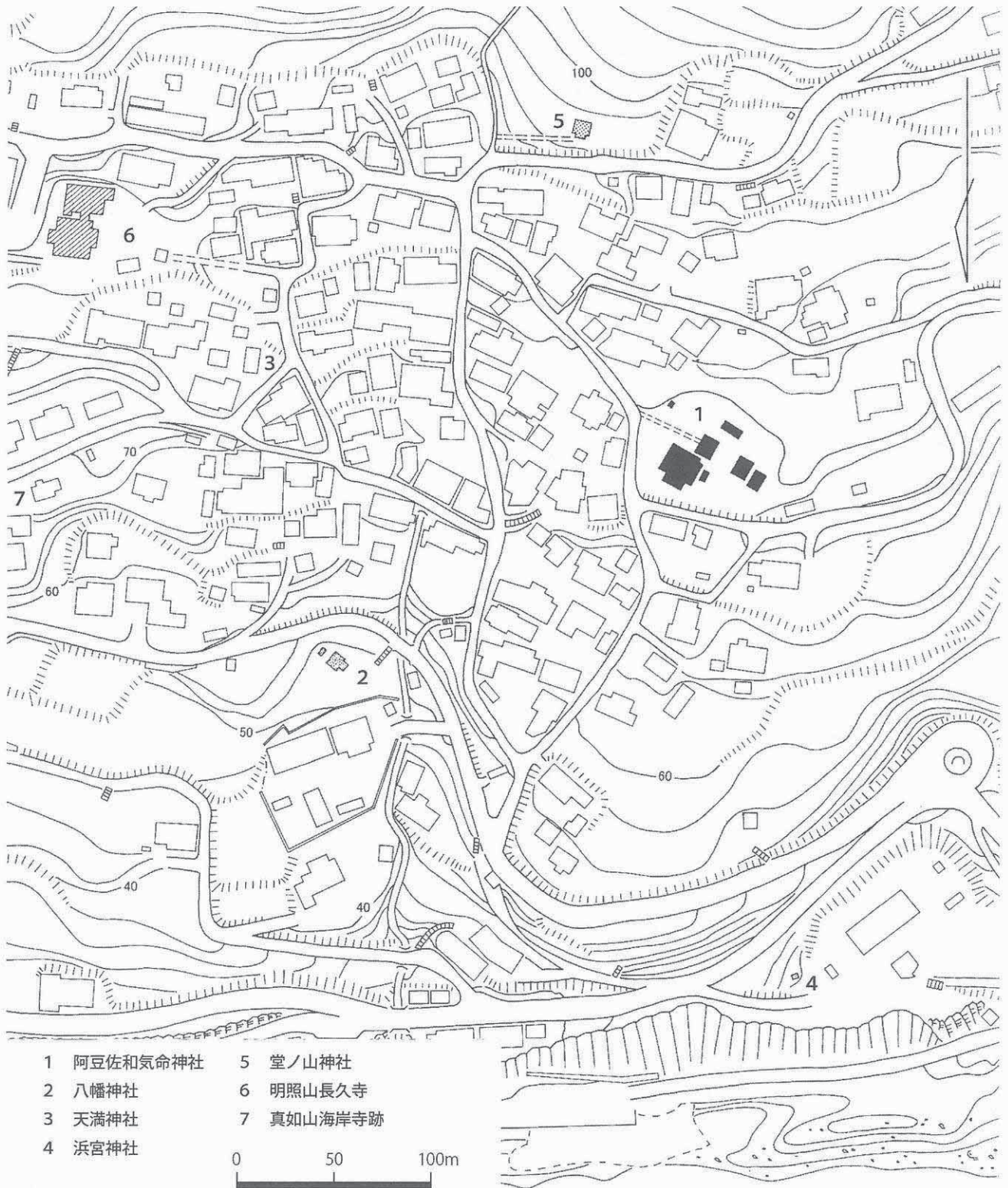
## II. 伊豆利島の社堂と祭祀遺跡

### (1) 預大明神と利島の祭祀空間

『三宅記』によると、三嶋大明神が焼き出した島々には、彼の后や王子が置かれたというが、不思議なことに利島には家族神の記載が認められない。しかし、預大明神と呼ばれる利島の代表的神社は、三嶋

大明神の御子を祀るとする社伝を持つだけでなく、延喜式内社の阿豆佐和気命神社に擬せられる古社であった(三橋1981)。また、利島北部の集落中心に鎮座する同社には、預大明神と后神の下上大明神が共に祀られているが、これとは別に所謂山宮が存在

している。利島では、島の中心に聳える宮塚山を中心として、「一番神様・アヅカサマ」と呼ばれる預大明神(阿豆佐和気命神社本宮)、「二番神様・ミサキサマ」と呼ばれる山神様(大山小山神社)、そして「三番神様・オリノボリサマ」と呼ばれる下上明



第1図 利島集落の社寺(青木・内川・須藤編2005を基に作成)

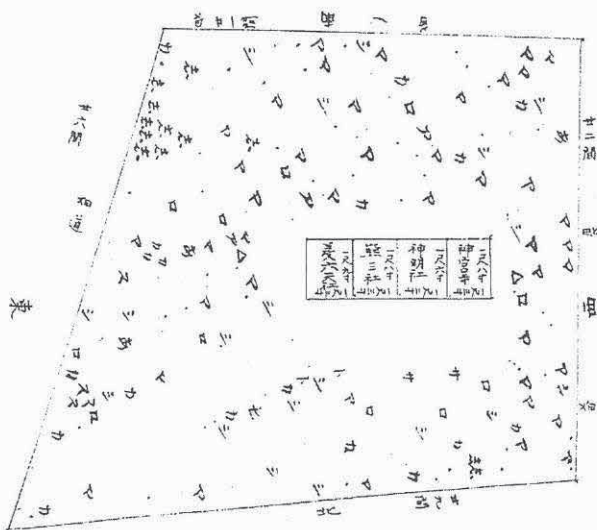
神（下上神社）を反時計廻りに巡る「ヤママワリ」が、預大明神の忌日である12月27日前後に行われる年末年始の恒例行事なのであった。

ちなみに、預大明神の本宮は、その墓所であると伝えられ、古木の下に積石が営まれている（水越1899）。恐らく、これも古くから残る積石遺構であろうが、島内随一の聖域であり、学術的な立ち入りも憚られてきた。しかし、阿豆佐和気命神社境内遺跡の実態が示す通り、早く12世紀後半頃から里宮としての場も存在しており、里宮・山宮が今日的な空間構成を見せるようになった時期が、遅くとも鎌倉時代まで遡ることはほぼ確実であろう。

## （2）問題の所在—堂ノ山神社の前身—

利島では、他にも多数の神社が営まれたが、むしろ殆どが小祠であり、独立した境内や大型社殿を持たない例が多い。阿豆佐和気命神社同様に、一定規模の社容を誇り得るものは、八幡神社と堂ノ山神社程度であろう（第1図）。また、これらの神社は、先に触れた通り、相互の密接な関連性が窺われる祭祀遺跡を境内に持つことでも共通している。

ところが、この内の堂ノ山神社は、明治初年の社堂合祀によって成立した神社であり、神明社・大六天社・熊野三社・神宮寺社の4社で構成されている（第2図・第1表）。本来これらの社は、八幡神社の八幡講と同じく、神明講・大六天講・熊野三社講・神宮寺講が、個々に祀っていたものであった（郷田



第2図 堂ノ山神社境内図 明治20（1887）年『東京府管下伊豆国利島阿豆気神社明細帳』（利島村編1996b）

1959）。明治20（1887）年の『東京府管下伊豆国利島阿豆気神社明細帳』は、堂ノ山神社の詳細にも触れているが、祭神も由緒も不明となっており（利島村編1996b）、この場所に講の神々が合祀された理由もわからない。

但し、かつて堂ノ山神社の地に「神宮寺」が存在したという伝えは、同社の前史を窺う上で重要な示唆を与えてくれる（利島村1996a）。また、『三宅記』の成立背景となった薬師信仰の実態を、島々に残された文化財や伝承から明らかにしようと試みた土岐昌訓氏は、利島梅田氏蔵の『古来より覚書之帳』に「堂山薬師」の名が見えることに注目し（金山1959）、これを堂ノ山神社の前身であろうと指摘した（土岐1981）。このような提起は、江戸中期の実情を伝えるとされる『古来より覚書之帳』のみに根拠が限定されており、なお検証すべき点が残されてはいるものの、そもそも三嶋大明神と本地薬師如来に対する信仰が盛んな伊豆諸島の文化を追求する上で極めて重要な意義を持つ。なぜか爾後の歴史学・考古学的研究において十分な注目を得てこなかったが、改めてこの提起を検証することで、堂ノ山神社境内遺跡や利島の信仰史、ひいては伊豆諸島の積石信仰の本義に関する一層豊かな理解が得られるであろう。

残念ながら、堂ノ山神社境内遺跡の最盛期に属する文書は存在しないが、幸い『利島村史』等に主たる村史関連資料が集成されており、近世・近代の様相は概ね把握することが可能である。そこで、本稿では、現存する文書類から利島における社寺構成の推移を検証し、「堂山薬師」と堂ノ山神社の関係性を明らかにしたい。併せて、関係する絵図に描かれた社寺と現況を比較することにより、社寺構成に関

神社名	講名称	講元 (平成8年当時家号)	昭和33年 所属戸数 (神明講所属)
八幡神社	八幡講	タロウザエモン (タンダア)	40 (15)
堂ノ山神社	神明講	カエモン (イダイモ)	15
	大六天講	タロウエモン (タロス)	29
	熊野三社講	サブロウエモン (サブロベイ：インキョ)	1
	神宮寺講	ソウエモン (サブロベイ)	3 (1)

第1表 利島における主要な講の概要（郷田1959、利島村編1996aを基に作成）

する検証結果の確実性を担保していく。その上で、堂ノ山神社の成立過程にも触れつつ、中世から続く祭祀空間の特質と変容過程について、一定の見通しを提示しておこう。

### Ⅲ. 堂ノ山神社関連史料の再検討

#### (1)「薬師堂」と「堂山薬師」

廃仏毀釈や神社合祀の影響が、残念ながら前近代の在地信仰を窺い知る上で大きな障害となっている事実は、大方の認めるところであろう。伊豆諸島のような島嶼地域でも、地域的な偏りはあるものの少なからぬ影響を被っており、今日的な社寺の構成を、直ちに前近代、ましてや中世以前の実態と認めて歴史的な解釈を試みることは不可能と言ってよい。ところが、利島の社寺関連文書を概観してみると、近

世・近代の神社数に大差は無く、江戸時代中期から明治時代にかけての社寺構成を比較することは勿論、神社合祀過程についても検討可能であることが解ってきた（【 】内に示した史料番号は、第2表に掲げた史料番号と共通する）。

利島における社寺構成の記録は、安永3（1774）年の『伊豆国付島々様子大概書』【史料1】が古い。この文書では当時の具体的な社寺名は殆ど触れられていないものの、預大明神以下21社、2堂の存在と、海岸寺・長久寺の2寺を記録する。その内、ここで言う21社とは、天明2（1782）年の『伊豆国付利島指出帳』【史料2】以降に度々見られる、預大明神・下り上り大明神・三島明神・八幡宮・宇渡間宮・神明宮・浜之宮・天満宮・第六天宮・龍神宮・山河宮・道祖神宮・大島大明神・御戸口宮・御崎之宮・若尊

史料 No.	史料 1	史料 2	史料 3	史料 4	
年代	安永3（1774）年3月	天明2（1782）年8月	文化12（1815）年9月	江戸時代中期	
文書	東京都公文書館蔵 『伊豆国付島々様子大概書』	東京都公文書館蔵 『伊豆国付利島指出帳』	国立国会図書館蔵 『伊豆国七島明細記』巻ノ三	利島梅田家蔵 『古来より覚書之帳』	
出典	利島村1996b	利島村1996b	利島村1996b	金山1959	
社寺	本宮預大明神	預大明神	預大明神	預大明神	
	外式拾社	下り上り大明神	下り上り大明神	下り上り大明神	上下大明神
		三島大明神	三島明神	三島明神	三島大明神
		宇渡間宮	宇渡間宮	宇渡間宮	宇渡間宮
		山河宮	山河宮	山河宮	山川之宮
		大島大明神	大島大明神	大島大明神	大島大明神
		御戸口宮	御戸口之宮	御戸口之宮	御戸口之宮
		(西之宮大明神)	(西之宮大明神)	(西之宮大明神)	(西之宮)
		御崎之宮	御崎之宮	御崎之宮	御崎宮
		若尊宮	若尊宮	若尊宮	若尊宮
		第三王子宮	第三王子宮	第三王子宮	大三之宮
		貴之宮	貴之宮	貴之宮	貴之宮
		天津大明神	天津大明神	天津大明神	天神？
		龍神宮	龍神宮	龍神宮	竜神
		抱瘡神宮	抱瘡神宮	抱瘡神宮	開神之宮？
		道祖神宮	道祖神宮	道祖神宮	道祖神
		八幡宮	八幡宮	八幡宮	若宮八幡
		天満宮	天満宮	天満宮	天満宮
		浜之宮	浜之宮	浜之宮	浜之宮
		西之宮大明神	西之宮大明神	西之宮大明神	西之宮
	神明宮	神明宮	神明宮	神明	
第六天宮	第六天宮	第六天宮	第六天		
堂式ヶ所	薬師・観音堂 (薬師・観音堂)	薬師・観音堂 (薬師・観音堂)	堂山薬師 観音堂		
寺式ヶ所	法華宗長久寺	法華宗長久寺			
	法華宗海岸寺	法華宗海岸寺			
管轄	伊豆国：～慶応4（1868）年6月 → 韮山県：～明治4（1871）年11月 → 足柄県				

第2表 利島社寺構成対照表

宮・貴之宮・疱瘡神宮・第三王子宮・西之宮大明神・天津大明神に相違ない。

また、2ヶ所の堂とは、同じく【史料2】以降に記載がある薬師堂と観音堂を指すものであろう。これらの堂については、【史料1】・【史料4】が各々1ヶ所ずつ存在するとしているが、【史料2】・【史料3】では「薬師・観音堂」と記し、一体のものとして認識している場合もあったらしい。観音堂に関しては、明治16（1883）年の『利島観音堂明細書』が残されており、当時は別当の梅田四郎左衛門に管理されていたことが知られる（利島村編1996b）。少なくとも、この時期の前後には独立した観音堂が存在していたことが確実であり、その所在地は「利島村59番地で、堂山神社の南方のほとんど隣接地に当り、今はツバキ林になっている」という（金山1959）。

なお、2ヶ所の寺院は共に日蓮宗に属しており、明照山長久寺と、これに隣接して営まれた真如山海岸寺は、15世紀に遡る歴史を持つと伝えられているものの、近世以前の実態は不明な点が多い。ちなみに、昭和56（1981）年から診療所が置かれている地に存在した海岸寺は、明治35（1902）年に長久寺と合併して廃された後、大正12（1923）年に再び分離して栃木県氏家町（現さくら市）の新しい寺に名を譲り、更に正法山妙福寺と寺号を改めて今日に至っている。

それはともかく、【史料1】に示された社寺数は、「堂山薬師」の名を今に伝える【史料4】を含め、【史料2】から【史料6】まで概ね共通しており、史料相互の比較検討を容易にするものとして歓迎すべきだろう。もっとも、【史料4】に見える「天神」と「開

史料5	史料6	史料7	地図No.
明治8（1875）年11月	明治11（1878）年4月	明治20（1887）年6月	
東京都公文書館蔵 『伊豆国付利島大概帳』	東京都公文書館蔵 『御管轄伊豆国属利島調書簿』	東京都公文書館蔵 『東京府管下伊豆国利島阿豆気神社明細書』	
利島村1996b	利島村1996b	利島村1996b	
阿豆気神社	郷社 阿豆気神社	郷社 阿豆佐和気命神社 (祭神：阿豆佐和気命・下上御方・神武天皇)	1
下上神社	村社 下上神社		
三島神社	村社 三島神社	境内末社 三島神社	
鷯渡間宮	末社 鷯渡間神社	境内末社 山河神社・宇渡間神社	
山河宮	末社 山河神社		
大島之宮	末社 大島神社		
御戸口宮	末社 御戸口神社	境内末社 西宮神社・御戸口神社・大島神社	
(西之宮)	(末社 西之宮)		
御崎之宮	末社 御崎神社		
若尊之宮	末社 若尊神社	境内末社 第三王子・若尊神社・白浜神社・御崎神社	
第三王子宮	末社 第三王子神社		
貴之宮	末社 貴之宮	境内末社 天津神社・姫宮神社・貴宮神社	
天津宮	末社 天津神社		
龍神宮	末社 龍神社	境内末社 海龍神社・疱瘡神社	
疱瘡神	末社 疱瘡神社		
道祖神宮	末社 道祖神社	境内末社 道祖神社	
八幡宮	末社 八幡宮	無格社 八幡神社(祭神：応神天皇)	2
天満宮	末社 天満宮	無格社 天満神社(祭神：菅原道真)	3
浜之宮	末社 浜明神		4
西之宮	末社 西之宮	無格社 浜宮神社・西宮神社	
神明宮	末社 神明社		5
第六天宮	末社 第六天神社	無格社 堂山神社 (合祀：神宮寺・神明社・熊野三社・第六天社)	
—	—	—	—
—	—	—	—
寺式ヶ寺	長久寺		6
	海岸寺		7
足柄県：～明治9（1876）年4月 → 静岡県：～明治11（1878）年1月 → 東京府	東京府：～現在		

神之宮」に限っては、ここで示した別の文書との確実な対応関係を把握することができない。しかし、【史料4】の「天神」が、他の文書に現れる「天津大明神」・「天津宮」に当たるものであろうことは、消去法的に考えても妥当なところである。また、明治期の史料と思われる利島村役場蔵『神社明細帳』に目を遣ると（桜井1959）、「海竜神」と「疱瘡神」が共に海神である大綿津見神を祀っている点に気付く。両社で祀っていた神の神名・神格や、その共通性が前近代まで遡るか否かは不明だが、【史料4】の「開神之宮」を海神之宮と解せば、これと「疱瘡神宮」＝「疱瘡神」が同一の社であった可能性は高い。

このように、大方の社堂については、第2表に示した対応関係を認めて良からう。従って、【史料4】に見える「堂山薬師」も、【史料1】～【史料3】の「堂」＝「薬師堂」に相当するものと考えて大過無いように思われる。しかし、この「薬師堂」は、前近代の島内主要社堂のうち、明治以降の消息が不明な唯一の事例でもある。

## (2)「薬師堂」と堂ノ山神社

ところで、ここで見てきたように、堂ノ山神社の前身としては「神明宮」・「第六天宮」の名が江戸時代中期から確認できるものの、「神宮寺」と「熊野三社」については詳しい記録がない。そこで、試みに阿豆佐和気命神社に現存する関連社堂の棟札を列挙してみると次の通りとなる（金山1959）。

元禄7（1694）年2月 建立薬師  
元禄7（1694）年2月 建神明  
元禄7（1694）年2月 大六天魔王  
享保2（1742）年4月15日 勧請神明大神宮  
天保15（1844）年11月 再興神明宮  
嘉永3（1850）年3月10日 再建薬師如来  
嘉永3（1850）年3月10日 再建熊野三社  
明治21（1888）年7月 再興神明神社  
明治41（1908）年9月21日 再建立堂山神社熊野三社

資料数の限界はあるものの、これらの棟札からは、神明宮・熊野三社・大六天魔王と薬師堂の建て替え時期が共通している事実を看取することができる。この事実は、恐らく単なる偶然ではなく、後に堂ノ

山神社に統合される社堂の結びつきは、少なくとも17世紀末から浅からぬものがあつたに違いない。そうすると、やはり堂ノ山神社の地に存在したとの指摘がある「神宮寺」こそ（利島村編1996a）、「堂山薬師」＝「薬師堂」の後身ではないかとする見通しが有力となろう。但し、神宮寺講自体も現在では衰微しており、その由来を追及することは極めて難しい。更に、明治期に入ると、【史料5】・【史料6】のような島の概要を記録した公文書から薬師堂の記載が消えてしまっており、堂の消息は以後全く見当たらないと言ってよい。そこで、利島関係の絵図に寺社の旧態、とりわけ堂ノ山神社境内地の原状を求めてみると、極めて興味深い事実が明らかになってきた。

第3図は、新島前田家蔵の絵図である（利島村編1996b）。島の北端には「濱宮」、その左斜め上には「八幡」と書きつけてあるのが判るだろう。「八幡」の奥には寺院のような建物が2棟描かれているが、これは長久寺と海岸寺に違いない。一方、ロータリー状を呈している集落の中心域から右に目を転ずると、預大明神に相当する鳥居と社殿があり、その上には朱で書かれた堂と「堂山薬師」の文字が見える。加えて、山頂付近の左手には、「下上り」の社も描かれている。この制作時期は不詳だが、前近代の島を対象にした鳥瞰図は珍しく、「堂山薬師」の名が残されている点でも貴重な絵図である。

第4図は、東京都公文書館蔵の『伊豆国付利島全図』である（利島村編1996b）。図の左下に戸長の梅田新吉が署名していることから、本図の調製時期は、梅田が利島の戸長であった明治7年7月から、明治9年8月の間に限定されよう（利島村編1996a）。第3図と同じく、島内の社寺が細かく描かれており、預大明神に相当する「神社」の南側には、はっきりと「薬師堂」の姿が見える。現在の道は、これらの絵図や地籍図などとは大きく異なっている部分も少なからず認められるものの、ここで議論の俎上に挙げている利島北部の村落中心域については、前近代以来のものが概ね踏襲されていると見てよい（第1図）。特に、俯瞰図である第4図は、現在の状況と比較する時、最も信頼性が高いものと評価できる。

そこで、第1図に示した現況と、これらの絵図を対照してみると、近世文書で「薬師堂」＝「堂山薬



第3図 新島前田家蔵絵図 (利島村編1996b)



師」などと呼ばれた施設が、確実に今日の堂ノ山神社境内に存在していたことが看取されよう。特に、第4図の記載によって、この薬師堂が少なくとも明治一桁代まで認知されていた事実が明らかとなった。三宅島の薬師堂も、「堂宇山」と呼ばれる地に営まれているが、「堂ノ山」とは、まさに「堂」の存在する「山」なのだ。ところが、この「薬師堂」は、「神宮寺」と入れ替わるようにして、史料から全く姿を消すのである。

### (3) 堂ノ山神社の成立

では最後に、堂ノ山神社の成立、即ち薬師堂の消滅と、神明社・大六天社・熊野三社・神宮寺社の合祀過程についても触れておこう。その経緯は、【史料6】と【史料7】の比較から具体的な様相が見えてくる。明治11(1878)年の『御管轄伊豆国属利島調書簿』【史料6】には、「神明社」・「第六天神社」について記載があるが、明治20(1887)年の『東京府下伊豆国利島阿豆気神社明細書』【史料7】からは、これらの名が消えた代わりに「無格社 堂山神社」が現れている。【史料7】の作製に関する直接的な根拠法令と見られる明治18(1885)年5月22日東京府達丙第66号は、伊豆諸島を含む府内の神官住職祠堂受持人に対して、同年5月31日現在の社寺明細書を提出するよう指示したものであるが(内閣記録局編1891)、何らかの理由で利島からの提出は2年ほど遅れたらしい。つまり、ここで見た史料の限りでは、明治11(1878)年4月から明治18(1885)年5月、或いは明治20(1887)年6月までの間に、堂ノ山神社の合祀がなされたと判断することができる。

このように、利島では明治10年代に社堂の合併や存廃に関わる何らかの動向があった。しかし明治初年は、広く小社等の整理が進められた明治30年代末以降とは異なり、社堂の統廃合が厳しく規制されていた時期である(森岡1987・1988)。明治9(1876)年12月15日には、管理不能な社堂の合併、もしくは移転を府県に要請する一方、特に維持を願い出る例は申請により存立を許可する旨定めた教部省達第37号が発せられたが(内閣記録局編1891)、ここで整理対象となっているのは、あくまで今後の維持が見込まれない神祠仏堂に限られていた。そうすると、講の小祠を合祀して成立した堂ノ山神社に関しては、

一般社寺と区別のつかない「人民私邸内等ニ自祭スル神祠仏堂」への参拝行為を禁止し、なお参拝を希望する場合は、その永続方法や、受け持ちの神官僧侶などについて府県を通して申請するよう定めた明治9(1876)年12月15日教部省達第38号の影響を重く見るべきであろう(内閣記録局編1891)。この教部省達第38号が定めるところでは、私邸内で祀っていた講の神々を、そのまま存続させることはできないのである。そうすると、この問題を解決するために、講の社を合祀して新たに堂ノ山神社を設け、島の祠官の管理下に置いたのではないかという推測が成り立つ。

但し、その合祀は、明治9(1876)年教部省達第38号を受けて直ちに実施されたものではなく、明治10年代のある段階まで降ってのことである。それまでの間に、利島において神社行政上の動きがあったとすれば、明治17(1884)年に前田新右衛門から石田助左衛門へ阿豆気神社祠官の職が移ったこと程度であろうか。この石田助左衛門は、島の伝統習俗や神仏習合に対して批判的な「近代化」志向の人物であり、明治20(1887)年11月に村名主となるや、徹底した神仏分離を図ろうとしたことで知られる(利島村1996a)。かかる事情に鑑みると、明治18(1885)年東京府達丙第66号の求めに応じて、新たに社寺明細帳を作成する必要に迫られた石田が、祠官としての立場から社堂の整理を進めた可能性も今後の検討に値するであろう。

## IV. 小結

### (1) 堂ノ山と三嶋信仰

以上、些か迂遠な手続きを経ながら、堂ノ山神社の前身が薬師堂に他ならない事実を確かにしてきた。薬師堂そのものの消息については確実な史料が得られていないが、新たに堂ノ山神社を置くことで旧来の信仰の場は維持され、或いは薬師堂も「神宮寺」社に退転しつつ命脈を保ったものかと思われる。

改めて言うまでもないが、『三宅記』では三嶋大明神と王子の本地を薬師如来とし、后神の本地を観世音菩薩とする。実際、三宅島の富賀神社と伊豆薬師堂、大島の大宮神社と元町薬師堂、新島の十三社神社と久須志神社(旧薬師堂)、神津島の物忌奈神社と薬王殿、そして八丈島の優婆夷宝明神社と大里

薬師堂、といった社堂のセット関係は、伊豆諸島世界全般に浸透していたと見て良い。このような三嶋信仰の構造は、本稿で検討した利島においても、阿豆佐和気命神社と堂ノ山神社(薬師堂)の存在によって具現化されているのである。

もっとも、本稿で取り扱った史料は、近世から明治初頭の例に限られており、利島における三嶋信仰の構造が中世まで遡るものか否かについては検討の余地無しとしない。しかし、ここで検討の対象とした利島堂ノ山では、再三触れてきた通り12世紀半ばから近代に至る祭祀の痕跡が見出される。そこには、伊豆諸島特有の積石塚が営まれ、和鏡などの品々が捧げられていた。これは、阿豆佐和気命神社の境内遺跡でも共通して見られる様相であり、島の主神と、その本地である薬師如来を祀る場が、共に中世に遡って設定されていた事実は動かない。15世紀半ばに三宅島で編まれたと思われる『三宅記』には利島の記載が殆ど認められないが、むしろ利島の関連祭祀遺跡に、『三宅記』成立以前の在地的プロト三嶋信仰が考古学的遺跡として残されているのだ。

## (2) 積石塚と伊豆諸島の靈魂観

ところで、かつての利島には、専門的な神職はおらず、島の人々が輪番で祭祀を司ってきた。興味深いのは、明神様と堂山様を担当するオオボオリが、年末にオツテグラと呼ばれる御幣を各戸に配り、家々では、それをオクダマサマに供える風習である(郷田1959)。屋敷神であるオクダマサマは、屋敷裏の絶壁に穿った小穴に祀られることが多く、一定の年月を経た祖霊が宿るとされたり、死者の臍の緒を収めたりすることもある。オクダマサマは、まさに島の人々の魂の帰る場所であり、母なる穴なのだ。

このように、祭りを司る者が、間接的ながらも祖霊の祭祀に関与している事実は重要である。「本島従前寺テフモノハ無シ、人死スレバ山へ持ち行キ葬リシト云フ、今猶其ノ跡存ス、雑草深キ所板石ヲ積ミタルアリ、五輪ノ如キ断碑ヲ見ルアリ、然レトモ此断碑ハ内地ヨリ持ち越セシモノナリト云ヘハ、其板石ノウツタカキ所コソ本島布教以前の埋葬地と思フベケレ」という明治28(1895)年の記録は(水越1895)、当時の島人たちが積石に対して持っていた理解の一端を示している。かかる認識が、どこまで

遡及するかについても一層の検討が求められようが、伊豆諸島では他の島でも、祭祀の場としての積石と、墓としての積石が平面的な形態分類では見分けが付きにくい(橋口1975、内川1994)。これは、そもそも伊豆諸島人が、神と祖霊を明確に弁別していなかった証左とも言えよう。勿論、利島にも本格的な仏寺も営まれ、位牌分けといった祖霊祭祀に纏わる特殊な風習も見られるが(中込2005)、このような重層的な島の信仰文化の内に、より古層に属する靈魂観が残されていると見てよいのではなからうか。

現在の利島では、堂ノ山神社が薬師堂であった事実に対する意識は希薄である。しかし、考古学的な遺跡の評価を試みる時にも、このような通時的在地信仰史の理解が豊かな過去の実態を紐解く切っ掛けにもなり得る事例を示すことができたとするれば、一先ず本稿の目的は達したということになる。

## 参考文献

- 青木 豊・内川隆志編 1994a 『御蔵島 神ノ尾遺跡』 國學院大學海洋信仰研究会  
青木 豊・内川隆志編 1994b 『伊豆利島 堂ノ山神社境内祭祀遺跡』 利島村教育委員会  
青木 豊・内川隆志・金成南海子編 1999 『伊豆利島 八幡神社境内祭祀遺跡』 國學院大學考古学資料館  
青木 豊・内川隆志・須藤友章編 2005 『阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡』 國學院大學海洋信仰研究会  
内川隆志 1994 「伊豆諸島における集石遺構の類型」『伊豆利島 堂ノ山神社境内祭祀遺跡』 利島村教育委員会  
金山正好 1959 「新島、利島の神社概観」『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第二分冊 東京都文化財調査報告書7 東京都教二育委員会  
郷田(坪井)洋文 1959 「ムラ人の信仰生活」『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第二分冊 東京都文化財調査報告書7 東京都教育委員会(再録:1975『伊豆諸島一世代・祭祀・村落』 未来社)  
桜井徳太郎 1959 「北部伊豆諸島の信仰伝承」『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第二分冊 東京都文化財調査報告書7 東京都教育委員会  
東京都教育委員会編 1958 『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第一分冊 東京都文化財調査報告書6 東京都教育委員会  
土岐昌訓 1981 「三嶋大明神縁起の成立背景」『神道宗教』105 神道宗教学会  
利島村編 1996a 『利島村史』通史編 利島村  
利島村編 1996b 『利島村史』研究・資料編 利島村  
内閣記録局編 1891 『法規分類大全』第一編 社寺門(復

- 刻：1979 『法規分類大全』第26巻 原書房)
- 中込睦子 2005 『位牌祭祀と祖先観』吉川弘文館
- 永峯光一・青木豊・内川隆志編 1994 『伊豆利島 堂ノ山神社境内祭祀遺跡』利島村教育委員会
- 橋口尚武編 1975 『三宅島の埋蔵文化財』伊豆諸島考古学研究会
- 三橋 健 1978 「三嶋大明神縁起」『國學院大學紀要』16 國學院大學
- 三橋 健 1981 「阿豆佐和氣命神社」『式内社調査報告』10 式内社研究会
- 水越正義 1895 「伊豆国利島ノ土俗」『東京人類学雑誌』116 東京人類学会
- 水越正義 1899 「伊豆国利島の住人」『東京人類学雑誌』164 東京人類学会
- 森岡清美 1987 「明治初年における集落神社の制度的改革」『近代の集落神社と国家統制—明治末期の神社整理一』日本宗教史研究叢書 吉川弘文館
- 森岡清美 1988 「明治初年における小祠処分と無格社」『日本宗教史論纂』桜楓社
- 吉田恵二編 1983~2001 『東京都三宅村伊豆 物見処遺跡』國學院大學考古学実習報告6~35 國學院大學考古学研究室